

システム制御情報研究発表講演会用スタイルファイル

Style File for ISCIE Conferences

著者の所属 ○著者 氏名, 共著 者

A. U. Thor and C. O. Author

Affiliation of the author(s)

Abstract This is a sample document which uses the ISCIE style file. Please use the keyword ‘englishabstract’, not to be confused with the predefined ‘abstract’ environment. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. The quick brown fox jumps over a lazy dog’s back. And so on ...

1 はじめに

システム制御情報学会研究発表講演会(SCI)用のスタイルファイル `sci.sty` は ASCII版の `pLATEX` を想定して作られており, それ以外での動作は未確認です. このスタイルファイルは `pLATEX2ε` および `pLATEX2.09` に対応しております. 加えて, Overleaf v2上の `pdfLATEX` および `pLATEX` で動作するように本サンプル`sci.tex` では, プリアンブル部分および本文中の一部の記述が変更されています.

ファイル `sci.sty` には漢字コードが含まれていません. 動作環境により漢字コードの扱いが異なりますので, 場合によってはコード変換の必要があることにご注意ください.

サンプルファイル `sci.tex` は `sci.sty` の使用例になっていますので, 題目, 著者名などの書き方の参考例としてお使いいただけます.

基本的に, `LATEX`で原稿を作成する場合, 1行あたりの文字数や, 1ページあたりの文字数を正確に見積もることは困難です, 執筆要項にある文字数, 行数はあくまでも一つの目安とお考えください. ただし, 講演論文集としてCD-ROMに収録する際に支障が生じないように, 上下左右の余白は執筆要項で指定された値以上を確保するようにご注意ください.

以下は, `sci.sty` の補足説明ですが, これはユーザマニュアルのようなものを意図したものではなく, むしろテクニカルマニュアルに近いものとお考えください.

なお, 2001年度より, 従来のA4サイズからB5サイズへの縮小を取り止め, A4サイズ原寸のままで印刷することになりました. さらに, 2007年度からは論文集を印刷せずにCD-ROMに収録することになりました. この変更により `sci.sty` は以前の `iscie.sty` から大幅に変更されています. 2000年度以前の `iscie.sty` は使用できませんのでご注意ください

さい. 2019年度より予稿集は主にWebダウンロードでの配布に切り替えられました.

以下は, `theorem` 環境の使用例です.

定理 1 ここに定理の内容を記述して下さい. 系や補題の場合も同様です.

証明 ここには定理の証明を記述して下さい. 証明の最後には印がつきます. □

定理などの文章は, もともとイタリック書体を使うようになっていますが, 和文との整合性を考えて, ローマン書体を使うように変更しています.

2 数式関係

`\eqnarray` を使うと, 等号 (とは限りませんが) の両側のスペースが広すぎるように感じられたので, この間隔を変更しています. やはり, 必要に応じて `\eqnarray` を再定義している部分を変更あるいは削除してください.

以下は, `eqnarray` 環境の使用例です.

$$\dot{x}(t) = Ax(t) + Bu(t) \quad (1)$$

$$y(t) = Cx(t) + Du(t) \quad (2)$$

3 英語原稿

英語原稿の場合は `jarticle` ではなく `article` を使い, プリアンブルで `\english` を忘れずに指定してください. また, `\usepackage{latexsym}` も指定してください (`LATEX209` の場合を除く).

クラス/スタイルオプションファイル `sci.sty` に漢字コードが含まれていますので, 英語原稿の場合でも日本語の `pLATEX` 環境が必要です. ただし, 原稿を記述した `.tex` ファイルや整形後の `.dvi` ファイル

に漢字コードが含まれないようにすることは可能です。

英語原稿では必ずしも口頭発表者の氏名の前に○印をつけることが要求されていないようですが、印をつける場合には `{\LARGE \circ}` のように入力してもよいと思われます。

4 その他

スタイルファイル中ではPlain TeX の `\def` および LaTeX の `\newcommand`, `\renewcommand` が混在していますが、これは単に不統一なだけで、深い意味はありません。

参考文献は、ふつうに `\cite{foo}` と書いておくと、「これまでの研究[1]では～」のようになります。以前の `iscie.sty` では当時の会誌や論文誌に合わせた形式となるように設定していましたが、最近の会誌は LaTeX の標準形式に準拠しており、`sci.sty` でも同様にしています。

論文原稿の投稿後、学会側で余白に脚注などが追加される可能性を考慮すると、`\footnote` は使用しないほうが無難かと思われます。

節の区切りでは、`\section` や `\subsection` などを使うことを前提として、文字サイズや行間隔などを再定義しています。必要に応じて、該当部分の定義を調整してください。

原稿中に明示的な文字サイズ変更指定を含めることは想定していません。したがって、本文中で `\Large` や `\small` などを使用した場合には、文字サイズや改行間隔などが必ずしも意図どおりにならない可能性があります。

5 おわりに

このスタイルファイルには、改善を要する点が多数含まれていることと存じますが、会員諸賢によって、よりよいものが作成されるための足がかりとなれば幸いです。

参考文献

- [1] I. S. Cie: The ISCIE Style File; ISCIE Journal, Vol. 0, No. 0, pp. 000–999 (2000)
- [2] 文献：ISCIE用スタイルファイル；システムと制御と情報, Vol. 00, No. 0, pp. 000–999 (2000)